

論文

東日本における古墳時代の斜交埋葬施設

滝 沢 誠

前方後円墳などの堅穴系埋葬施設には、墳丘の主軸と斜交するものが少なからず認められ、それらについては従来頭位原則とのかかわりを指摘する意見が多い。しかし、斜交埋葬施設は前方部が短いタイプの前方後円墳に多く採用されていることから、その起源を弥生時代の墳墓に求め、斜交そのものが一つの企画として存在していた可能性を指摘する意見もある。とくに帆立貝式古墳と纏向型前方後円墳に斜交埋葬施設が多く認められる点は、両者の系譜関係を示唆する事実としてきわめて重要である。この認識を出発点とし、小稿ではこれまで十分に取り上げられてこなかった東日本における斜交埋葬施設の実態を

整理し、斜交の意味や前方部短小タイプの性格について検討を試みた。その結果、斜交埋葬施設は前方部短小タイプを中心に古墳時代後期にまで存続していること、また、墳丘形態によって斜交に対する意識に差があることが明らかとなった。すなわち、前方部短小タイプでは、頭位原則を適用する一方で墳丘主軸の方向にはほとんど関心がなく、結果として明確な斜交を生み出している。そうした造墓意識の継続性を重視するならば、古墳時代中期以降の前方部短小タイプに想定されてきた従属的な性格は、その初現段階（纏向型前方後円墳）にまで遡る可能性がある。

I. はじめに

前方後円墳における堅穴系埋葬施設の主軸と墳丘の主軸との関係は、平行または直交の関係が一般的であるが、各地の資料に目を向けると、墳丘の主軸に対して埋葬施設の主軸を斜交させる事例が少なからず認められる。多くの場合、そうした斜交埋葬施設は例外的な少数派もしくは地域色を示すものとみなされ、とくに埋葬施設の主軸に何らかの頭位原則が想定される場合には、墳丘主軸が立地による制約を受けた結果、両者の平行直交関係が厳守できなかったものと理解されている。

そうした見方とは別に、かつて福永伸哉は、埋葬施設を斜交させること自体が一定の企画として存在していたのではないかという見解を述べたことがある（福永1990）。その中で、斜交埋葬施設の採用事例に帆立貝式古墳や造り出し付き円墳が多く、いわゆる纏向型前方後円墳（寺沢1984・1988）がかなりの比率で含まれているとした点は注目に値しよう。

福永は、形態的に類似する纏向型前方後円墳と帆立貝式古墳に斜交埋葬施設が共通して認められることを注視し、両者の関係について肯定的な見方を示している。そこで可能性として述べられたように、かりに斜交埋葬施設をとまなう前方部短小タイプの前方後円墳が定型化した前方後円墳とは異なる系譜の前方後円墳として存在しつづけていたとするならば、その歴史的性格の解明は、纏向型前方後円墳の理解にも少なからぬ影響を与えることになるだろう。

小稿では、以上の問題意識をふまえながら、東日本における斜交埋葬施設の実態を整理し、斜交の意味をあらためて検討することとする。その上で、斜交埋葬施設をつうじてみた前方部短小タイプの性格について、筆者なりの見通しを述べてみることにしたい。

Ⅱ．墳丘主軸と埋葬施設主軸をめぐる議論

具体的な検討に入る前に、墳丘主軸と埋葬施設主軸をめぐるこれまでの議論を振り返り、斜交埋葬施設を検討していく際の視点と問題点を確認しておく。

前方後円墳などの主軸方向と埋葬施設の方向に一定の規則性があることを、具体的なデータにもとづいて最初に論じたのは斎藤忠である。斎藤は、前方部に南面または西面するものが多いのは、埋葬施設の方向と密接な関係があるとし、そもそも埋葬施設の主軸を規定していた根本原理は、頭位をある方向に向けるという方位に対する観念であったと論じた（斎藤 1953）。

同じころ小林行雄と近藤義郎は、前期古墳の変遷を論じる中で、墳丘主軸に対して直交する埋葬施設が古く、平行する埋葬施設が新しいという見解を示した（小林・近藤 1959）。現在こうした変遷観をただちに受け入れることはできないが、そこに後円部埋葬施設と墳丘主軸が一定の規則性をもって存在するという認識があったことは確かであろう。

その後、斎藤が注目した埋葬頭位のあり方を古墳出現論に関連させながら論じたのは都出比呂志である。都出は、畿内の前期古墳の中でも古相に属するものは北優位の原則が重視されていたと指摘し、埋葬頭位の規則性に乏しい弥生墳丘墓と対比しながら、そこに新たな祭祀型式の創出を読みとろうとした（都出 1979）。また、斜交する埋葬施設については、墳丘主軸が立地条件による制約を受けた際に北優位の原則を保持した結果であるとの認識を示した¹⁾。

以後、都出が指摘した北優位の原則は、定型化した前方後円墳の指標として重視されていくことになるが、一方でそれとは異なる地域ごとの埋葬頭位に着目した研究もあらわれる。

関東地方の前半期古墳における埋葬頭位を検討した岩崎卓也は、茨城県域では北優位、千葉県域では東西優位というように、埋葬頭位には地域ごとの傾向が認められ、都出が指摘した北優位原則の規制力が必ずしも一様ではないことを示した（岩崎 1983）。また、讃岐の前期古墳について検討した玉城一枝は、立地条件によって左右される墳丘主軸とは対照的に、埋葬施設の主軸はほぼ正確に東西方向を示しており、少なからず存在する斜交埋葬施設は東西優位の原則を優先した結果であろうとの理解を示した（玉城 1985）²⁾。

こうして埋葬頭位の地域差が次第に明らかにされる中で、北條芳隆は、墳丘主軸、埋葬施設主軸、方位の三要素に着目し、それらの相関関係について積極的な解釈を試みた。北條は、畿内と吉備の前期古墳においては墳丘主軸と埋葬施設主軸を平行または直交させ、かつ頭位を北に向けるという共通の原則が認められるとし、両地域間にはそうした原則を生むほどの強い結束力ないしは厳格な統制力が働いていたと論じた（北條 1987）。この北條による研究は、三要素を明確な意図のもとに分析し、それらの地域差にも配慮しながら畿内と吉備の共通性を抽出した点において、従来の議論をさらに深化させたものといえよう。

以上に取り上げた研究の多くは、斜交埋葬施設を頭位原則にしたがったものとみているが、それらとは異なる視点で斜交埋葬施設の意義を見出そうとしたのは、宇野隆夫、春日真美らである。宇野、春日らは、富山県谷内16号墳の調査事実にもとづき、後円部において墳丘主軸に斜交する埋葬施設は、それに直交して取り付く墓道の存在に関係しているとの見方を示した(宇野・安1988; 春日1988)。斜交の意味を葬送儀礼のあり方と関連づけたこの解釈は、従来にはない新たな視点を提示したものとして注目されるが、斜交埋葬施設以外でも直交する墓道を想定しうるのかなど、検討すべき課題が多い。

こうした先行研究をふまえながら、斜交埋葬施設の性格を正面から論じたのは福永伸哉である。福永は、斜交埋葬施設の多くに頭位原則との関連が認められるとしつつも、前方後円墳定型化以前の墳墓にかなりの割合で斜交埋葬施設が採用され、それらの中には一定の方位を示さないものが多いとの判断から、もともと斜交自体が一つの企画として存在していたのではないかとの見方を示した。また、纏向型前方後円墳にかなりの比率で斜交埋葬施設が認められること、さらに中期前半以前の帆立貝式古墳や造り出し付き円墳にも斜交埋葬施設の事例が多くみられることから、前期末以降に複雑さを増す首長間の秩序の中で、旧式の企画があらためて意味づけを与えられたのではないかとの見通しを示した(福永1990)。

この福永による研究は、斜交埋葬施設の歴史的性格にまで踏み込んだ、きわめて示唆に富んだものである。とくに、斜交埋葬施設が纏向型前方後円墳に多く認められるとともに、帆立貝式古墳や造り出し付き円墳にも少なくないことを指摘した点は重要であろう。福永は、両者の類似した墳丘形態に注意を払いながら、その年代差を考慮して、前期末の段階で「お蔵入りになっていた古い設計図」が再び用いられた可能性を指摘している。その一方で、「旧式になった企画が傍流となりながら継続して」いた可能性についても言及している³⁾。

以上によって明らかなように、斜交埋葬施設をめぐる議論は、頭位原則の有無という問題にとどまらず、それを多く採用した墳丘形態の特異性と相俟って、纏向型前方後円墳や帆立貝式古墳といった前方部が著しく短いタイプ的前方後円墳がどのような性格をもっていたのかという問題にも波及していく可能性を秘めている。しかし、福永の重要な問題提起にもかかわらず、この方面についての議論は十分に深められていないのが現状である⁴⁾。

そこで小稿では、斜交埋葬施設の実態を整理することにより、斜交そのものの意味を探るとともに、とくに前方部短小タイプ的前方後円墳に焦点をあわせて、斜交埋葬施設とのかかわりを検討することにしたい。また、そうした作業をふまえて、上述の問題をめぐる若干の見通しを述べてみることにしたい。なお、福永の分析は古墳時代前・中期における西日本の事例を主な対象としていたことから、小稿ではあえて東日本に事例を求め⁵⁾、対象時期を古墳時代後期にまで拡大して、当面の研究を前進させることとした。

Ⅲ. 斜交埋葬施設の実態

1. 墳丘形態と年代

ここでは東日本における斜交埋葬施設の実態を整理していくこととするが、その前提として斜交埋葬施設の範囲を明確にしておく必要がある。すなわち、墳丘主軸に対してどの程度の傾きが認められた場合に斜交埋葬施設として取り扱うのかという点であるが、当時の測量精度を把握しがたい現状において有意な基準を設定することは困難である。ここでは当面の実態把握を優先する立場から、かつて福永が設定した基準を踏襲し、墳丘主軸に平行または直交するラインから前後に10度以上の傾きが認められる事例を斜交埋葬施設として取り扱うこととする⁶⁾。また、墳丘上に複数の埋葬施設が存在する場合には、主丘部の中心的な埋葬施設を対象とし、副次的な埋葬施設については対象外とする。なお、以下で使用する方位は、すべて真北を基準としたものである⁷⁾。

第1表は、東日本における斜交埋葬施設の事例を集成したものである。まずそれらの墳丘形態をみると、合計39例のうち、前方後円墳が33例、前方後方墳が6例認められる。さらに前方後円墳の内訳をみると、そのうちの21例は前方部短小タイプの前方後円墳である。なお、ここでいう前方部短小タイプとは、後円部径に対して前方部長が1/2程度以下のものを指している⁸⁾。

このデータが示すように、東日本においては、斜交埋葬施設を採用したものの約半数が前方部短小タイプであり、斜交埋葬施設を採用した前方後円墳の約2/3がそれに該当する。第1表に示した39例のうち、かつて福永が取り上げたものは9例であり、そのうちの3例が前方部短小タイプであることからすれば、さらに高い比率で斜交埋葬施設と前方部短小タイプの結びつきを確認することができるであろう。

次に、斜交埋葬施設を採用した事例の年代についてみると、時期毎の多寡は認められるものの、古墳時代のほぼ全期間に及んでいることがわかる。第1表には、参考として「前方後円墳集成編年」(広瀬1992)による時期区分を示したが、6期をのぞくすべての時期に斜交埋葬施設の存在を確認することができる。その6期を含めた古墳時代中期の事例が少ないことには注意が必要であるが、そこに明らかな断絶が認められないことも事実である。とくに、前方部短小タイプがほぼ全期間にわたって認められる点は重要である。また、そうした継続性の一方で、古墳時代前期前半と古墳時代後期に多く事例が集中している事実も見逃すことはできない。前期前半の事例については纏向型前方後円墳とのかかわりが、後期の事例については関東において小型の前方後円墳が盛行する現象(岩崎1992)とのかかわりが考えられよう。

2. 前方後円墳と前方後方墳

上述した斜交埋葬施設の基本的なあり方をふまえ、以下では墳丘の形態毎にさらに詳しく斜交埋葬施設の実態を把握していくこととする。

第1図は、前方後円墳と前方後方墳のそれぞれに、上段に墳丘主軸と埋葬施設主軸(頭位)

東日本における古墳時代の斜交埋葬施設

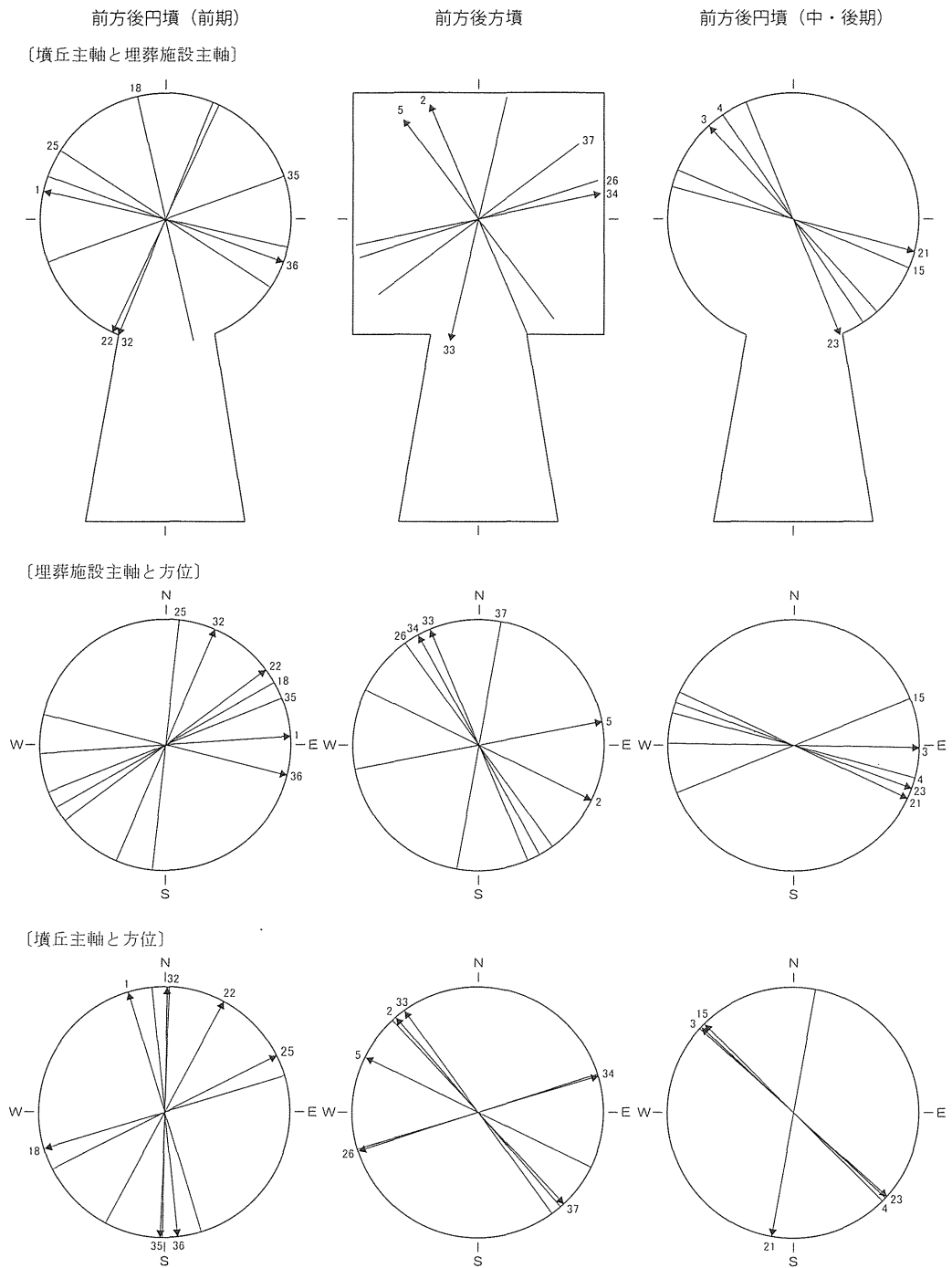
第1表 東日本の斜交埋葬施設

No.	古墳名	所在地	墳 丘			埋葬施設			集成編年
			墳 形	規 模	主 軸	種 別	斜交	斜交率	
1	会津大塚山	福島	前方後円	114m	N-19°-W	粘土槨 (南槨)	77°	29%	3期
2	森北1号	福島	前方後方	41.4m	N-41°-W	舟形木棺	23°	51%	2期
3	三味塚	茨城	前方後円	85m	N-47°-W	箱形石棺	42°	93%	8期
4	舟塚	茨城	前方後円	88m	N-139°-E	箱形石棺	34°	76%	9期
5	原1号	茨城	前方後方	29.5m	N-64°-W	木棺	37°	82%	2期
6	赤堀茶臼山	群馬	前方後円*	59m	N-98°-W	木炭槨 (1号)	14°	31%	5期
7	赤堀村285号	群馬	前方後円*	23.5m	N-36°-W	箱形石棺 (下)	62°	62%	9期
8	塚廻り4号	群馬	前方後円*	22.5m	N-99°-W	箱形石棺	41°	91%	9期
9	富沢28号	群馬	前方後円*	32.1m	N-98°-W	竪穴式石槨	60°	67%	9期
10	道場1号	群馬	前方後円*	10.6m	N-25°-W	(礫使用)	69°	24%	9期
11	片野10号	千葉	前方後円*	24.8m	N-142°-W	箱形石棺	35°	78%	10期
12	新城1号	千葉	前方後円*	27m	N-114°-W	木棺 (1号)	50°	89%	10期
13	小川台5号	千葉	前方後円*	30m	N-122°-W	木棺	22°	49%	10期
14	木戸前1号	千葉	前方後円*	40m	N-67°-W	箱形石棺	40°	89%	10期
15	明戸	千葉	前方後円	40m	N-45°-W	箱形石棺	67°	51%	10期
16	神門4号	千葉	前方後円*	49m	N-121°-W	箱形木棺	40°	89%	1期
17	小田部	千葉	前方後円*	22m-	N-124°-E	箱形木棺	40°	89%	1期
18	釈迦山	千葉	前方後円	93m	N-114°-W	粘土槨	13°	29%	4期
19	山王後1号	千葉	前方後円*	35m	N-43°-W	木棺 (第1)	69°	24%	10期
20	根田130号	千葉	前方後円*	34m	N-138°-W	木棺 (第1)	23°	51%	10期
21	鹿島塚8号	千葉	前方後円	38.6m	N-170°-W	木棺 (第1)	75°	33%	9期
22	手古塚	千葉	前方後円	60m	N-28°-E	粘土槨	25°	56%	3期
23	塚原7号	千葉	前方後円	40m	N-132°-E	箱形木棺 (第1)	22°	49%	10期
24	秋葉山3号	神奈川	前方後円*	50.4m	N-120-150°-W	(墓壇上面)			1期
25	甲斐銚子塚	山梨	前方後円	169m	N-63°-E	竪穴式石室	57°	73%	3期
26	瀧の峯2号	長野	前方後方	18m	N-108°-W	木棺	72°	40%	1期
27	神明塚	静岡	前方後円*	53m	N-53°-W	粘土槨	67°	51%	2期
28	各和金塚	静岡	前方後円*	66.4m	N-148°-E	竪穴式石室	43°	96%	5期
29	辺田平1号	静岡	前方後円*	20m	N-68°-W	礫床	40°	89%	8期
30	馬場平	静岡	前方後円*	47.5m	N-134°-W	箱形木棺	50°	89%	4期
31	経ヶ峰1号	愛知	前方後円*	35m	N-57°-W	竪穴系横口式石室	18°	40%	7期
32	花岡山	岐阜	前方後円	60m	N-1°-E	竪穴式石室	22°	49%	3期
33	象鼻山1号	岐阜	前方後方	40.1m	N-36°-W	木棺	13°	29%	2期
34	向山	三重	前方後方	71.4m	N-73°-E	粘土槨	78°	27%	3期
35	三王山1号	新潟	前方後円	37.5m	N-178°-W	木棺 (第1)	70°	44%	4期
36	谷内16号	富山	前方後円	47.6m	N-174°-E	割竹形木棺	70°	44%	2期
37	宇気塚越1号	石川	前方後方	19m	N-137°-E	箱形木棺	53°	82%	1期
38	神谷内12号	石川	前方後円*	27.5m	N-70°-W	箱形木棺	60°	67%	1期
39	宿東山1号	石川	前方後円*	21m	N-16°-W	箱形木棺	43°	96%	2期

- 1) 「前方後円*」は前方部短小タイプの方後円墳を示す。
- 2) 「墳丘主軸」は、前方部方向を示す。
- 3) 「斜交」は、後円 (方) 部後端側を基点とした、墳丘主軸と埋葬施設主軸がなす角度を示す。
- 4) 「斜交率」は、墳丘主軸と45°をなす方向への接近率を示す。

の関係、中段に埋葬施設主軸 (頭位) と方位の関係、下段に墳丘主軸 (前方部の方向) と方位の関係を示したものである。また、前方後円墳については、古墳時代前期のものと中・後期のものとにわけて示している。

まず前期の前方後円墳についてみると、墳丘主軸と埋葬施設主軸の関係に一定の傾向を認めることはできないが、埋葬施設主軸の方向にはおよその傾向を見出すことができる。すなわち、岐阜県花岡山古墳 (32: 第1表の番号、以下同様) と山梨県甲斐銚子塚古墳 (25) については南北方向、福島県会津大塚山古墳 (1)、新潟県三王山1号墳 (35)、富山県谷内16号墳 (36)



第1図 前方後円墳と前方後方墳における墳丘主軸・埋葬施設主軸・方位の関係

* 上・中段の矢印は頭位方向，下段の矢印は前方部方向を示す。番号は第1表に対応。

については東西方向とのかかわりがうかがえる。このうち、会津大塚山古墳と三王山Ⅰ号墳については、福島県域および新潟県域の前期古墳において東頭位が優越するという指摘（小林1989）に合致し、墳丘主軸をほぼ南北にとりながら大きく埋葬施設を斜交させている姿には、東頭位への強い指向性を読みとることができる。また、花岡山古墳と甲斐銚子塚古墳が南北方向を指向している点は、両古墳がともに長大な堅穴式石室を採用していることと無関係ではないだろう⁹⁾。他方、こうした正方位とのかかわりをうかがわせる事例とは異なり、千葉県手古塚古墳（22）と同釈迦山古墳（18）の埋葬施設は北東－南西方向をとっている。一見すると方位とのかかわりがないように思えるが、じつは千葉県域の前期古墳は東から北東にかけての頭位を示すものが多く、この両古墳もそうした地域内の傾向に即して理解することが可能である。

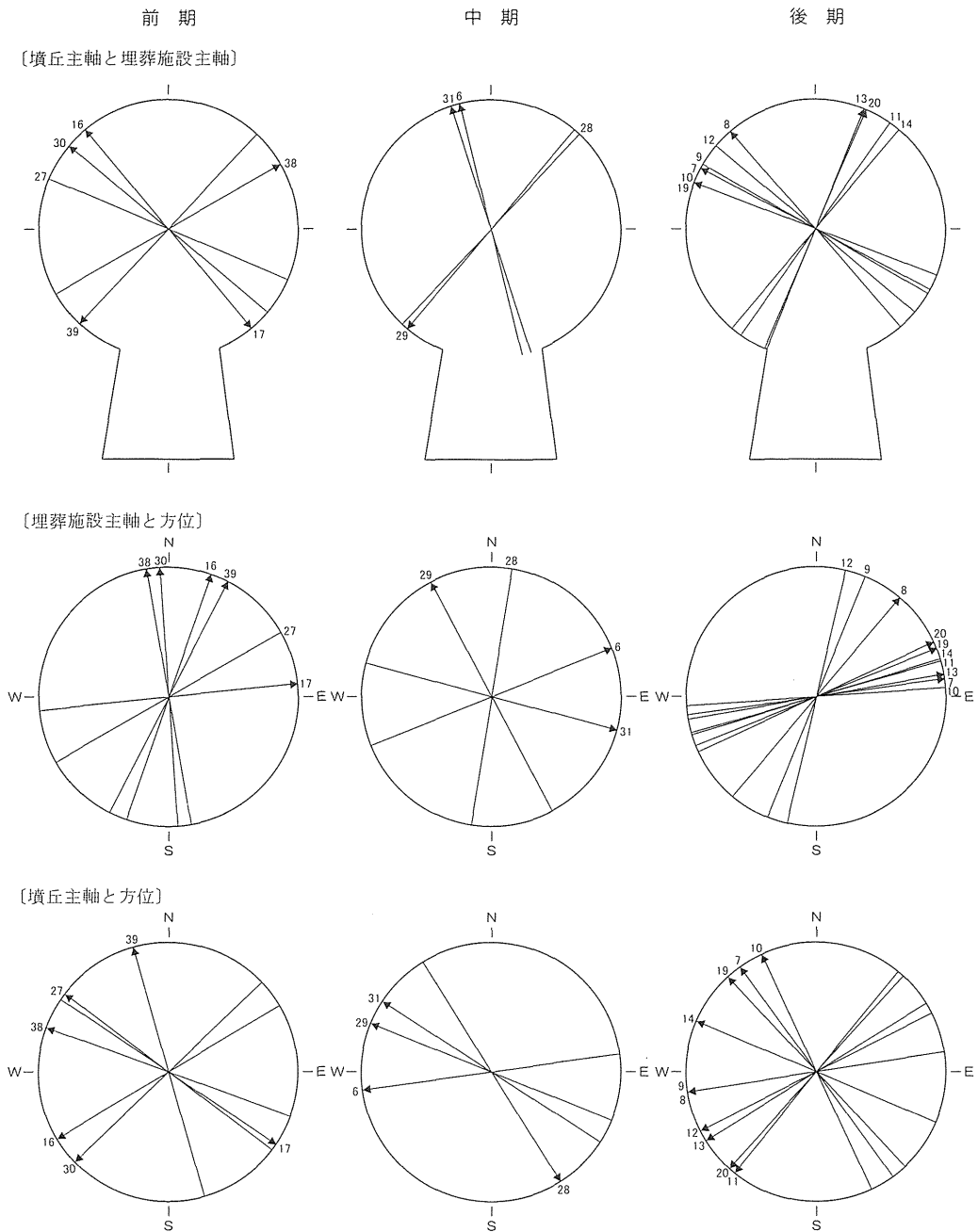
次に前方後円墳についてみると、同じ前期に属する前方後円墳と同様の状況を指摘することができる。やはり墳丘主軸と埋葬施設主軸の関係に一定の傾向を見出すことはできないが、埋葬施設主軸の方向にはおよその傾向を認めることができる。岐阜県象鼻山Ⅰ号墳（33）、三重県向山古墳（34）、石川県宇気塚越Ⅰ号墳（37）については南北方向、福島県森北Ⅰ号墳（2）、茨城県原Ⅰ号墳（5）については東西方向とのかかわりがうかがえ、いずれも墳丘の主軸方向に対して埋葬施設主軸を斜交させ、南北方向または東西方向に近づけている。ただし、墳丘主軸の方向についてみると、前期の前方後円墳では正方位により近いものが多いのに対し、前方後円墳では総じてそのような傾向は乏しいようである。

最後に中・後期の前方後円墳についてみると、墳丘主軸と埋葬施設主軸の関係には大まかな傾向を見出すことができる。すなわち、後円部を上側にした場合、すべての埋葬施設が左上方から右下方にかけて斜交している。また、埋葬施設主軸はいずれも東西方向に近いものであり、頭位がわかるものはすべて東頭位である。さらに、墳丘主軸の方向にも似た傾向が認められ、千葉県鹿島塚8号墳（21）をのぞく4例は、前方部の方向こそ異なるものの、そのいずれもが北西－南東方向に墳丘主軸を設定している。これらの傾向が何を意味するのかは、事例数が少なくにわかに判断しがたいが、ここでの事例すべてが茨城県域および千葉県域のものである点には注意が必要であろう。後述するように、古墳時代後期の千葉県域では、前方部短小タイプの前方後円墳においても東頭位への明確な指向性を認めることができる。その点もふまえるならば、当該域の前方後円墳においては、東頭位を基本としながら、埋葬施設の斜交の向きや墳丘主軸のとり方にも何らかの約束事が存在していた可能性がある。

3. 前方部短小タイプの前方後円墳

第2図は、前方部短小タイプの前方後円墳について、第1図と同様に示したものである。ただし、ここでの時期区分は、古墳時代前期、中期、後期の三区分とし、前期には前方後円形墓とも称される出現期のものを含めている。

やはり時期をおってみていくと、前期においては、墳丘主軸と埋葬施設主軸の関係に大まか



第2図 前方部短小タイプの前方後円墳における墳丘主軸・埋葬施設主軸・方位の関係

*上・中段の矢印は頭位方向，下段の矢印は前方部方向を示す。番号は第1表に対応。

な二つの方向性を認めることができる。すなわち、後円部を上側にしてみた場合、埋葬施設を左上方から右下方にかけて斜交させるものと、右上方から左下方にかけて斜交させるものの二者が存在し、そのほとんどは墳丘主軸に対して45度前後の傾きで明確に斜交している。ここでは、前者をL型、後者をR型と呼んでおこう。埋葬施設主軸の方向については、静岡県神明塚古墳（27: 第3図4）をのぞく5例において、南北方向または東西方向とのかかわりがうかがえ、そのいずれもが北頭位または東頭位である。一方、墳丘主軸の方向についてみると、石川県神谷内12号墳（38: 第3図2）と同宿東山1号墳（39: 第3図3）に東西方向または南北方向との緩やかなかわりが認められるものの、それ以外の事例では正方位とのかかわりを見出すことができない。

中期の事例は少なく、一定の傾向を読みとることには不安が残る。墳丘主軸と埋葬施設主軸の関係についてみると、静岡県各和金塚古墳（28: 第3図6）と同辺田平1号墳（29: 第3図7）は明確なR型であるが、群馬県赤堀茶臼山古墳（6）と愛知県経ヶ峰1号墳（31）は平行に近い斜交である。また、埋葬施設主軸の方向は、各和金塚古墳と辺田平1号墳が南北方向（北頭位）、赤堀茶臼山古墳が群馬県域における後期の事例と同様に北東―南西方向（北東頭位）をとるなど、総じて方位とのかかわりが認められる。墳丘主軸の方向については、前期の場合と同様で、赤堀茶臼山古墳が東西方向に近いものの、それ以外で正方位とのかかわりを見出すことはできない。とくに南北方向を指向する墳丘主軸が認められない点は、前後の時期とあわせて注意しておく必要があろう。

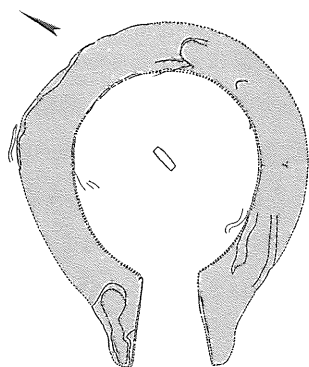
後期には多くの事例が認められるものの、すべて千葉県域と群馬県域の事例である。まず墳丘主軸と埋葬施設主軸の関係をみると、明確なL型とR型が数多く認められる。また、ほとんどの埋葬施設主軸は東西方向から北東―南西方向であり、頭位がわかるものはすべて東から北東の方向である。この点は、群馬県域の中・後期古墳（竪穴系埋葬施設）において東北東の頭位が卓越するという指摘（橋本1986）と合致している。墳丘主軸の方向については、ある特定の方向に収斂する状況は認められないが、前方部の方向はすべて北西から南西の範囲に収まっている。

IV. 斜交埋葬施設の評価

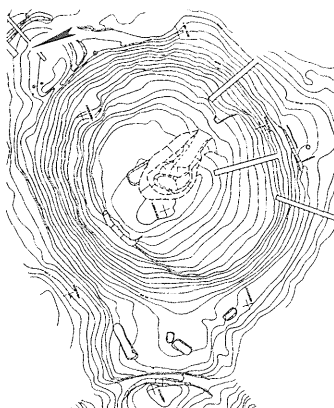
1. 斜交の意味

これまでの整理をふまえ、まずは斜交そのものの意味を考えてみたい。

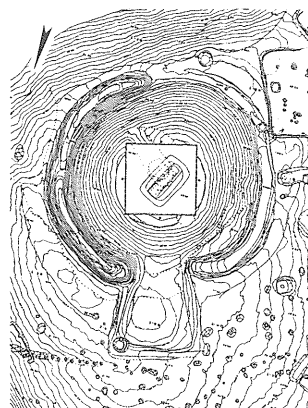
先にみたように、前期の前方後円墳と前方後方墳においては、斜交埋葬施設の多くが正方位もしくは地域内で卓越する方位（頭位）を指向している。また、中・後期の前方後円墳においては、東西方向（東頭位）への明らかなまとまりが認められる。さらに、前方部短小タイプの前方後円墳においても、全時期をつうじて、正方位もしくは地域内で卓越する方位（頭位）とのかかわりを示す事例が多数を占めている。一部に十分な理解が得られないものもあるが、こうした全体の状況から判断すれば、埋葬施設の斜交は基本的に頭位原則にしたがったものとみ



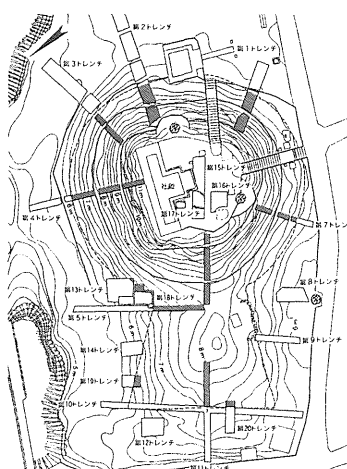
1 千葉・神門4号



2 石川・神谷内12号



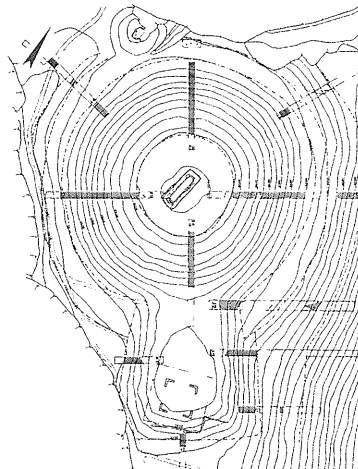
3 石川・宿東山1号



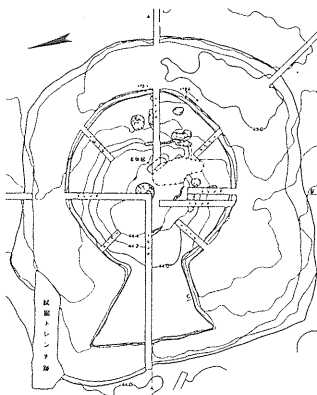
4 静岡・神明塚



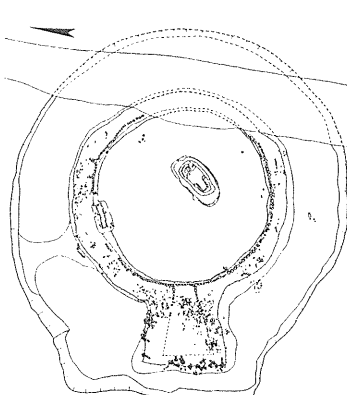
5 静岡・馬場平



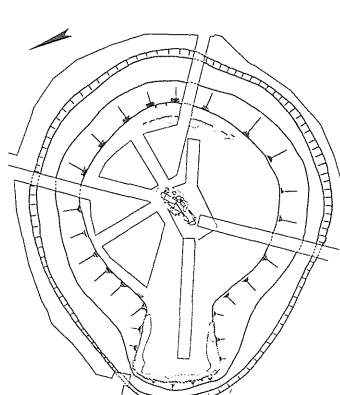
6 静岡・各和金塚



7 静岡・辺田平1号



8 群馬・塚廻り4号



9 群馬・赤堀村285号

第3図 斜交埋葬施設をともなう前方部短小タイプの前方後円墳

*縮尺: 1・4-6は 1/1200, 2・3・7-9は 1/600。

出典: 各資料文献より。一部改変 (偏角補正)。

るのが妥当であろう。

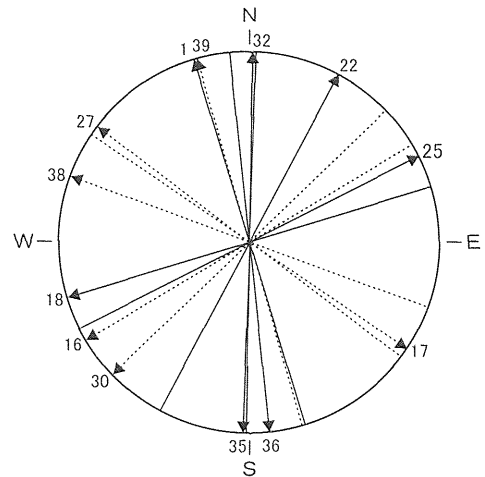
このような理解は従来からの見方を追認するものにほかならないが、それに加えてここで注意しておきたいのは、墳丘形態の違いによって斜交への意識に差があるとみられる点である。

前期の前方後円墳においては墳丘主軸をより正方位に近くとる傾向が認められ、そこには、立地による制約を受けやすい墳丘主軸においても方位との関係がある程度意識されていたことがうかがえる。この点は、前方後方墳の一部においても指摘することができる。また、それらとは方向性を異にするものの、中・後期の前方後円墳においても、墳丘主軸に対する何らかの配慮が存在していた可能性がある。一方、前方部短小タイプについてみると、墳丘主軸と正方位との関係は総じて稀薄であり、とくに前期の事例と同時期の前方後円墳とを比較すれば、その傾向は明かである（第4図）。後期の事例については、北西または南西の方向に墳丘主軸をとるものが多く、同時期の前方後円墳との共通性がうかがえるものの、そのばらつきは前方後円墳に比べて大きいようである¹⁰⁾。

以上の点をふまえてみると、前方後円墳においては、ある立地条件のもとで墳丘主軸を理想的な方位に設定できない場合でも、可能な限りそれに近づける努力がなされ、その上で頭位原則にしたがって埋葬施設を斜交させるという措置がとられたものと考えられる。結果的に、墳丘主軸と埋葬施設主軸の平行直交関係を厳密に維持できなくなるが、そこには規範からの逸脱を最小限に抑えようという意志を読みとることができる。一方、前方部短小タイプにおいては、埋葬施設主軸と方位（頭位）のかかわりは認められるものの、墳丘主軸と方位の結びつきに対する意識は、前方後円墳に比べて相対的に稀薄であるといえそうである。

上述の理解を別の角度からも検証しておこう。いま斜交の程度を把握するために、墳丘主軸と45度をなす方向を基準として、それへの接近度を斜交率として示すならば、前期の前方後円墳では、斜交率29-73%の範囲にあり、その平均は38%である。同様に、前方後方墳では、斜交率13-82%，平均49%，中・後期の前方後円墳では、斜交率33-93%，平均60%である。一方、前方部短小タイプでは、前期の斜交率51-96%，平均80%，中期の斜交率31-96%，平均64%，後期の斜交率24-91%，平均62%である。また、墳丘主軸方向よりも45度方向への接近を示す斜交率50%以上の事例は、前方後円墳では11例中4例、前方後方墳では6例中3例なのに対し、前方部短小タイプでは20例中15例を数える。

事例数が必ずしも多くはないこと、また、全体的な傾向と相容れない事例も存在することが



第4図 墳丘主軸の比較：前期の前方後円墳（実線）と前方部短小タイプ（破線）
* 矢印は頭位方向を示す。番号は第1表に対応。

ら、これらのデータを絶対視することはできない。しかし、前方後円墳との比較において、前方部短小タイプの斜交率が相対的に高く、明確な斜交といえるものが多いことは明らかであろう。

ここまでの検討結果をまとめるならば、斜交埋葬施設は基本的に頭位原則にしたがったものとみられるが、その墳丘形態によって斜交を採用するにいたった意識は異なっていたと考えられる。すなわち、前方後円墳では墳丘主軸の方向に対しても次善の配慮がうかがえるのに対し、前方部短小タイプでは頭位のみへの配慮にとどまるものが多いとみられ、そのことが両者における斜交の程度の違いにあらわれているようである。

すでに指摘されているように、古墳時代前期における東日本各地域の前方後円墳および前方後方墳は、墳丘主軸と埋葬施設主軸の関係を平行もしくは直交とするものが大多数を占めている（小林 1989）。また、中期および後期の前方後円墳においても、墳丘主軸と埋葬施設主軸を平行とするものが多いようである。とすれば、そうした全般的な傾向のもとにおける斜交埋葬施設の事例は、立地条件による制約を受けた墳丘主軸のもとで頭位原則の適用に特化した、やや例外的な存在と位置づけることができるであろう。

一方、前方部短小タイプにおいては、頭位原則の適用に関心はあるものの、墳丘主軸と埋葬施設主軸を平行もしくは直交にすること、すなわち墳丘主軸をある方位にあわせることには、当初からあまり関心がなかったようである。この場合の斜交埋葬施設は、そうした意識のもとで生じたいわば必然的な存在といえるであろう。そもそも前方部短小タイプは、通有の前方後円墳に比べて小規模なものが多く、墳丘主軸の設定における立地上の制約は相対的に少なかったと思われる。にもかかわらず、墳丘主軸に前方後円墳ほどの有意な方向性が認められない点は、そうした意識を背景にしたものと考えられよう。

こうしてみると、ひとくちに斜交埋葬施設といっても、前方後円墳や前方後方墳と前方部短小タイプとでは、その意味合いが異なっているようである。その対極にある前方後円墳と前方部短小タイプについて簡潔にまとめれば、墳丘主軸、埋葬施設主軸、方位（頭位）の三要素を念頭にいた前方後円墳の斜交埋葬施設と、頭位に主眼をいた前方部短小タイプの斜交埋葬施設という整理が可能である。つまり、それらの三要素に関しては、より理想的な姿を目指した前方後円墳と、当初からその指向性に乏しい前方部短小タイプという見方ができるのである。

2. 斜交埋葬施設と前方部短小タイプ

先に指摘したように、東日本における斜交埋葬施設の半数以上は前方部短小タイプの前方後円墳である。これについては、前方部短小タイプに小規模なものが多いため、調査事例そのものが多いのではないかという見方も予想される。確かに、古墳時代後期に関東で盛行する小規模前方後円墳の事例数がその占有率に影響している事実は否定できない。しかし、上述の検討結果をふまえるならば、両者の結びつきはそうした見かけ上の問題ではなく、頭位方向に意を注ぎながらも墳丘主軸の方向には特段の関心を示さない前方部短小タイプの造墓意識に起因す

るものと理解されよう。

それでは、そうした造墓意識はどのようにして生じたのであろうか。残念ながら、今回対象とした東日本の範囲では、この問いに十分答える材料は得られていない。しかし、かつて福永伸哉が讃岐の事例に即して述べたように（福永 1990）、その淵源は弥生時代における円形原理の墳墓にあるとみるのが妥当であろう。円形原理の墳墓では、本来的に墳丘の軸線に対する意識が乏しいと考えられるからである。

ところで、福永はそうした理解につづけて、前方後円墳定型化以前の墳墓において、埋葬施設の斜交それ自体が一つの企画として存在していたのではないかと推測している。これは、円丘に突出部をとまなう当該期の墳墓において、必ずしも埋葬施設と方位（頭位）のかかわりが認められないという判断にもとづくものである。しかし、そこに提示された資料をみる限り、緩やかに南北方向もしくは東西方向を指向している事例が多いようである。また、その後に調査された奈良県ホケノ山古墳（岡林・水野編 2008）や石川県神谷内 12 号墳（38）などの事例を加えれば、その傾向はさらに強まるものと思われる¹¹⁾。

もしも斜交が厳密な企画として存在していたとするならば、被葬者の頭位を前方部側に向けるのか後円部側に向けるのか、あるいは墳丘主軸に対してどちら側に斜交させるのかなど、方位とはかかわりのない要素において、ある程度の共通性を備えていてもよいように思える。しかし、ここでいう L 型と R 型はともに認められ、前方部側か後円部側かといった頭位の方向も一定してはいない¹²⁾。引きつづき検討を重ねるべき重要な問題提起ではあるが、当面の事実面に即してみる限り、そこに企画というほどの計画性を読みとることはむずかしいようである。ここでは、先に述べたような前方部短小タイプにおける造墓意識のあり方が斜交を生み出した基本的な要因であったと考えておきたい。

その上で、小稿においてとくに問題視したいのは、そうした造墓意識にもとづく前方部短小タイプの前方後円墳が、古墳時代のほぼ全時期をつうじて存在しているとみられる点である。

今回取り上げた範囲では、出現期の神門 4 号墳（第 3 図 1）、小田部古墳、神谷内 12 号墳（同 2）などにつづいて、前期前半の宿東山 1 号墳（同 3）、神明塚古墳（同 4）、前期後半の馬場平古墳（同 5）が認められ、斜交埋葬施設をとまなう前方部短小タイプの前方後円墳は、出現期に限定されることなく前期をつうじて存在している。事例数こそ少ないものの、その存在は中期にも引きつづき認められ、後期においては、関東における小規模前方後円墳の盛行とともに再びその存在を際立たせている。

もちろんそれらの墳墓要素を詳しく検討すれば、少なからぬ差異が存在することは明らかである。例えば、くびれ部幅が増大する後期の墳丘形態を、中期以前のそれと同一視することには慎重な意見もあろう。しかし、そうした墳丘形態の変異は、時間的な推移や地域的な墳丘企画の問題として理解することが可能であろうから、むしろ短小な前方部と斜交埋葬施設という基本的な墳墓要素が根強く命脈を保っている点にこそ、その本源的な性格が潜んでいると考えたいのである。

3. 前方部短小タイプの性格

そこで問題となるのは、そもそも前方部短小タイプの前方後円墳はどのような性格を有しているのかという点である。纏向型前方後円墳についてはひとまず措くとして、これまで帆立貝式古墳や帆立貝式前方後円墳と称されてきたものに限ってみれば、その年代論や企画論などをめぐって多くの議論が蓄積されてきている（櫃本 1984; 遊佐 1988; 沼澤 2006 など）。いまそれらに共通した基本的な見解にしたがうならば、少なくとも中期以降の事例には、その直接的な造墓基盤となった政治領域の中で有力首長に連なる階層的な立場にあった被葬者、あるいは近畿の政治中枢とのかかわりにおいて直属的な立場にあった被葬者を想定することができるであろう。すなわち、通有の前方後円墳とは異なる造墓意識を共有し、斜交埋葬施設の採用にも柔軟な前方部短小タイプの前方後円墳は、古墳時代中期以降、従属的な性格をもつ古墳として立ちあらわれているのである。

こうした理解に大きな誤りがなければ、さらなる問題として、一連の造墓意識の基調をなす前期以前の事例に、同様の性格を想定することの是非が問われることになる。この点については、個々の事例に即して慎重に判断していく必要があるが、例えば、静岡県西部に位置する前期後半の馬場平古墳（30: 第3図5）は、同時期の大型前方後円墳である松林山古墳や銚子塚古墳に比べてはるかに規模が小さい。同古墳は小地域を基盤とした首長墳とみなしてよいものであるが、近隣地域に位置する大型前方後円墳との比較において優位な墳墓要素は認められず、その点で劣位の評価を免れることはできない。

いわゆる纏向型前方後円墳については、それを弥生墳丘墓とする意見（白石 1999 など）や定型化前方後円墳に先行する最初の方後円墳とする意見（寺沢 1984・1988・2000）がある一方で、定型化前方後円墳と階層的な関係をもつ古墳として理解しようとする意見もある（橋本 1996; 今尾 2009 など）¹³⁾。それらの諸説についてここで本格的な検討を行う用意はないが、すでに指摘されているように（都出 1992; 北條 2000）、そうした一群の流れをくむ墳墓が定型化前方後円墳成立以後にも少なからず営まれている点には重大な関心を払う必要があろう¹⁴⁾。

先に述べたように、斜交埋葬施設をとまなう前方部短小タイプの前方後円墳には、通有の前方後円墳とは異なる造墓意識の根強い残存を認めることができる。この点は、中期以降の前方部短小タイプに想定されてきた基本的な性格が、それ以前にも遡りうることを多分に示唆しているように思える。すなわち、明確な斜交を生み出した特異な造墓意識の継続性に着目してみたとき、前方部短小タイプはかなり早い段階から階層的劣位にある墳丘形態ではなかったかという疑いが生じてくるのである。

もちろん以上のような見方は、斜交埋葬施設という一つの墳墓要素から導き出したものにすぎない。当然のことながら、こうした議論を進めるためには、奈良県箸墓古墳とその周辺に点在する纏向型前方後円墳の年代的理解をより確かなものとする必要がある。また、かりにそれらが階層的構成を示すものであったとしても、それ以外の場所では単独墳もしくは主墳としての営みを常態とする前期段階の前方部短小タイプを一律に理解しうるのかという問題は残る。

さらには、前期末頃から本格化する政治的階層構成の複雑化に際して、その性格に変化が生じたとする見方についても十分な検証が必要である。いずれも今後の課題とするほかはないが、小稿で検討してきた斜交埋葬施設は、前方部が短いという墳丘形態とともに、それらの問題に迫りうる重要な墳墓要素であることは間違いないであろう。

V. おわりに

以上、東日本における古墳時代の斜交埋葬施設を取り上げ、斜交の意味や前方部短小タイプの前方後円墳とのかかわりについて述べてきた。その成果は、ほぼ次の三点にまとめられる。

まず一点目は、斜交埋葬施設が古墳時代のほぼ全期間をつうじて認められ、その半数以上が前方部短小タイプの前方後円墳であることを明らかにした点である。とくに、後期にいたるまで斜交埋葬施設と前方部短小タイプに緊密な関係が認められる事実は、その性格を探る上できわめて重要である。

二点目は、斜交埋葬施設と頭位原則とのかかわりを確認した上で、その墳丘形態によって斜交への意識に差があることを指摘した点である。すなわち、前方後円墳では墳丘主軸の方向にもある程度配慮した斜交であるのに対し、多くの前方部短小タイプでは墳丘主軸への配慮を欠いた斜交である。後期にまで及ぶ斜交埋葬施設と前方部短小タイプの組み合わせは、そうした造墓意識の根強い残存をうかがわせるものである。

三点目は、斜交埋葬施設を生み出した造墓意識の継続性を重視し、中期以降の前方部短小タイプに想定される性格がその初現段階にまで遡りうる可能性を指摘した点である。この点は、その後につづく中核的政治勢力の形成過程にかかわる問題であるだけに軽々には論じられないが、そうした議論を視野に入れて斜交埋葬施設の評価を行う必要がある。

冒頭でふれたように、小稿の議論は、福永伸哉によるかつての問題提起によるところが大きい。その所説との対比をはかるならば、定型化前方後円墳以前の墳墓において斜交が一つの企画として成立していた可能性を説く福永に対し、ここでは頭位原則の適用と墳丘主軸に対する意識の欠如を重視し、通有の前方後円墳とは異なる前方部短小タイプの造墓意識に斜交の主要因を求める結果となった。また、そうした造墓意識の根強い残存を認め、主に中期以降に想定されてきた前方部短小タイプの性格が、その初現段階にも遡りうる可能性を指摘するにいたった。福永は、前期末の段階で「古い設計図」もしくは「旧式になった企画」があらためて意味づけを与えられたと述べている。すすんで筆者は、そうした階層秩序の整備にともなう動きの中で、それ以前からの意味づけが踏襲され、かつ大がかりに更新された姿を想定してみたいのである。

いずれにしても、斜交埋葬施設についてはなお議論の余地があり、とくに今回検討を果たせなかった西日本の事例についても、時期を問わず幅広く検証を進める必要がある。また、現地での方向を決定づけた当時の測量技術や土木技術にも十分に目を向けなければならない。それらの分析を欠いた小稿の不備はもとより明らかであるが、一方で斜交埋葬施設をめぐる議論の

新たな可能性を提示しえたとするならば、そのささやかな取り組みも意義なしとはいえない。いまは当面の基本的理解を示し、残された問題については後考を期すことにしたい。

註

- 1) 都出はその後、古墳時代前期の竪穴式石室について検討する中で埋葬頭位について言及し、東西優位を示す事例の多くは、畿内で発達した竪穴式石室とは異なる石室型式を採用するものであり、石室型式と埋葬頭位には密接な関係があることなどを指摘している（都出 1986）。
- 2) 東四国の前期古墳において東西方向の埋葬施設が卓越する点については、天羽利夫と岡山真知子による指摘がある（天羽・岡崎 1982）。また、東日本の前期古墳における地域ごとの埋葬頭位については、小林隆幸による全般的な整理がある（小林 1989）。
- 3) 帆立貝式古墳について全般的な検討を行った遊佐和敏は、両者の類似性に着目しながらも、その系譜関係については否定的な立場をとっている（遊佐 1988）。
- 4) 福永はその後、あらたな資料を加えながら、斜交埋葬施設について同様の見解を述べている（福永 2011）。
- 5) ここでいう東日本とは、東北、関東、東海、中部高地、北陸の各地方を含む便宜的な区分である。
- 6) 福永は、畿内と吉備の前期古墳について分析した北條の成果（北條 1987）を参考に斜交の基準を設定している。墳丘主軸と埋葬施設主軸の間に厳格な平行直交関係が認められる畿内と吉備では、その誤差が基準線に対してプラスマイナス 10 度に集中していることを念頭においたものである。
- 7) 各事例の方位については、調査報告書等に真北表示の記載があるもの以外は基本的に磁北を示すものと理解し、それぞれの地点における偏角を整数值化して補正を加えた。また、墳丘主軸と埋葬施設主軸の方位に関する調査報告書等記載の数値については、原則としてそれを採用したが、筆者による図上計測と十分な一致がみられない場合は、図上計測による数値を採用した。
- 8) 遊佐和敏による「帆立貝式前方後円墳」の定義にほぼ相当するもので、「造り出し付き円墳」は含めていない（遊佐 1988）。なお、円形の主丘部に短い方丘部が取り付けいたものを前方後円墳の範疇とは分離すべきとの意見もあるが（沼澤 2004）、ここでは「縦向型前方後円墳」を含めた現象面の把握を優先して、かりに「前方部短小タイプの前方後円墳」と表現しておきたい。
- 9) 都出比呂志は、石室の型式差と頭位方向に密接な関係があるとし、長大型の竪穴式石室と北優位の頭位が関連することを述べている（都出 1986）。なお、花岡山古墳の場合は、埋葬施設主軸を墳丘主軸に平行させた方が南北方向に近づくが、頭位をあえて前方部側に向けるという選択に南北方向への指向性を認めておきたい。
- 10) この点については、竪穴系埋葬施設をとまなう後期前方後円墳との全体的な比較を行う必要がある。
- 11) それでもなお、方位との関係が判然としない事例は存在する。正方位とのかかわりをもたない地域ごとの指向性などについて、さらに個別の検証を進める必要がある。
- 12) ただし、古墳時代前期の前方部短小タイプについてみると、北陸を含む西日本では R 型が目立ち、東日本では L 型に限られている。これが何を意味するのか、さらなる事例の増加をまってみきわめる必要がある。
- 13) 弥生墳丘墓の研究を主導した近藤義郎は、縦向型前方後円墳とされるものについて、「箸中山古墳に並行してあるいは「直」後に築造された、一群の小形ないしは中形前方後円墳とするほかはない」と述べている（近藤 2005: 268 頁）。
- 14) この点に関連して都出比呂志は、帆立貝式古墳との類似性を念頭におきつつ、縦向型前方後円墳は成立段階からすでに劣位の墳丘形態だったのではないかと述べている（都出 1992）。一方、北條芳隆は、

弥生墳丘墓の系譜につらなる多様性を特徴とし、巨大前方後円墳（第2群前方後円墳）とは別系列の前方後円墳として存続する一群を「第1群前方後円墳」と呼び、縦向型前方後円墳の再評価を試みている（北條2000）。

参考文献

- 天羽利夫・岡崎真知子 1982 「曾我氏神社古墳群調査報告」『徳島県博物館紀要』第13集 1-62頁。
- 今尾文昭 2009 『古墳文化の成立と社会 1 古代日本の陵墓と古墳』青木書店。
- 岩崎卓也 1983 「古墳時代の信仰」『季刊考古学』第2号 29-31頁。
- 宇野隆夫・安 英樹 1988 「墓道」『谷内16号墳』小矢部市教育委員会・小矢部市古墳発掘調査団 44-48頁。
- 岡林孝作・水野敏典編 2008 『ホケノ山古墳の研究』橿原考古学研究所研究成果第10冊 奈良県立橿原考古学研究所。
- 春日真美 1988 「主体部」『谷内16号墳』小矢部市教育委員会・小矢部市古墳発掘調査団 40-44頁。
- 小林隆幸 1989 「前期古墳の埋葬頭位」『保内山王山古墳群』三条市教育委員会 126-129頁。
- 小林行雄・近藤義郎 1959 「古墳の変遷」『世界考古学大系 日本Ⅲ 古墳時代』平凡社。
- 近藤義郎 2005 『前方後円墳の起源を考える』青木書店。
- 斎藤 忠 1953 「古墳方位考」『考古学雑誌』第39巻第2号 34-40頁。
- 白石太一郎 1999 『古墳とヤマト政権』文春新書。
- 玉城一枝 1985 「讃岐地方の前期古墳をめぐる二、三の問題」『末永雅雄先生米寿記念献呈論文集』末永先生米寿記念会 261-280頁。
- 都出比呂志 1979 「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』第26巻第3号 17-34頁。
- 都出比呂志 1986 『竪穴式石室の地域性の研究』昭和60年度科学研究費補助金（一般C）研究成果報告書 大阪大学文学部。
- 都出比呂志 1992 「墳丘の型式」『古墳時代の研究 7 古墳Ⅰ 墳丘と内部構造』雄山閣出版 15-38頁。
- 寺沢 薫 1984 「縦向遺跡と初期ヤマト政権」『橿原考古学研究所論集』第6 吉川弘文館。
- 寺沢 薫 1988 「縦向型前方後円墳の築造」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズⅣ 99-111頁。
- 寺沢 薫 2000 『王権誕生 日本の歴史02』講談社（講談社学術文庫 2008年）。
- 沼澤 豊 2004 「帆立貝式古墳築造企画論 7. 小方部墳という墳形」『季刊考古学』第86号 87-94頁。
- 沼澤 豊 2006 『前方後円墳と帆立貝古墳』雄山閣出版。
- 橋本博文 1986 「Ⅴ. まとめ」『古海原前古墳群発掘調査概報』大泉町教育委員会 19-25頁。
- 橋本博文 1996 「いわゆる縦向型前方後円墳の再検討」『考古学と遺跡の保護』甘粕健先生退官記念論集 刊行会 199-221頁。
- 広瀬和雄 1992 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成 中部編』山川出版社 24-26頁。
- 榎本誠一 1984 「帆立貝形古墳について」『考古学雑誌』第69巻第3号 52-69頁。
- 福永伸哉 1990 「主軸斜交主体部考」『鳥居前古墳一総括編一』大阪大学文学部考古学研究室 103-120頁。
- 福永伸哉 2011 「埋葬姿勢と埋葬配置」『古墳時代の考古学 3 墳墓構造と葬送祭祀』同成社 227-234頁。
- 北條芳隆 1987 「墳丘と方位からみた七つ坑1号墳の位置」『七つ坑古墳群』七つ坑古墳群発掘調査団 95-109頁。
- 北條芳隆 2000 「前方後円墳と倭王権」『古墳時代像を見直す一成立過程と社会変革一』青木書店 77-135頁。
- 遊佐和敏 1988 『帆立貝式古墳』同成社。

資料文献

福島県

- 会津大塚山：伊東信雄・伊藤玄三 1964 『会津若松史別巻Ⅰ 会津大塚山古墳』会津若松市。
 会津大塚山古墳測量調査団 1989 『会津大塚山古墳測量調査報告書』会津大塚山古墳測量調査団。
 森北1号：土井健司・吉田博行ほか 1999 『森北古墳群』創価大学・会津坂下町教育委員会。

茨城県

- 三味塚：斎藤 忠・大塚初重ほか 1960 『三味塚古墳』茨城県教育委員会。
 舟塚：大塚初重・小林三郎 1968 「茨城県舟塚古墳」『考古学集刊』第4巻第1号 東京考古学会。
 原1号：茂木雅博 1976 『常陸浮島古墳群』浮島研究会。

群馬県

- 赤堀茶臼山：後藤守一 1933 『上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳』帝室博物館。
 赤堀村285号：松村一昭 1976 『赤堀村峯岸山の古墳Ⅰ』赤堀村教育委員会。
 塚廻り4号：石塚久則ほか 1980 『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会。
 富沢28号：近藤義郎編 1994 『前方後円墳集成 東北・関東編』山川出版社。
 道場1号：田村 孝 1989 『道場遺跡群 昭和61・62・63年度市営土地改良事業道場地区に伴う埋蔵文化財発掘調査』高崎市教育委員会。

千葉県

- 片野10号：尾崎喜左雄・石島和夫・富沢敏弘ほか 1976 『下総片野古墳群』芝山はにわ博物館。
 新城1号：勝又貫行ほか 1986 『新城遺跡・土橋城跡』多古町教育委員会。
 小川台5号：浜名徳永・梶山林継ほか 1975 『下総小川台古墳群』八匳教育委員会。
 木戸前1号：平岡和夫 1992 「高田古墳群」『芝山町史 資料集Ⅰ 原始古代編 第2分冊』芝山町。
 明戸：大村 直 1982 「明戸古墳の測量調査」『昭和56年度市立市川博物館年報』市立市川博物館。
 神門4号：田中新史 1977 「市原市神門4号墳の出現とその系譜」『古代』第63号 早稲田大学考古学会。
 田中新史 1984 「出現期古墳の理解と展望—東国神門5号墳の調査と関連して—」『古代』第77号 早稲田大学考古学会。
 小田部：杉山晋作ほか 1972 『古墳時代研究Ⅰ—千葉県小田部古墳の調査—』古墳時代研究会。
 大村 直ほか 1991 『市原市姉崎向山遺跡・小田部向原遺跡・雲ノ境遺跡』市原市文化財センター。
 釈迦山：小久貫隆史 1996 『市原市釈迦山古墳発掘調査報告書』千葉県教育委員会。
 山王後1号：祭り野遺跡・山王後古墳発掘調査団 1982 『千葉県市原市潤井戸地区 祭り野遺跡・山王後古墳』祭り野遺跡・山王後古墳発掘調査団。
 根田130号：田中新史 1981 「根田古墳群」『上総国分寺台発掘調査概報』上総国分寺台遺跡調査団。
 鹿島塚8号：豊巻幸正・佐伯秀人ほか 1991 『請西遺跡群Ⅱ 鹿島塚古墳群』木更津市請西第二土地区画整理組合・君津郡市文化財センター。
 手古塚：杉山晋作 1973 「千葉県手古塚古墳調査速報」『古代』第65号 早稲田大学考古学会。
 杉山晋作 2003 「手古塚古墳」『千葉県の歴史 資料編・考古2 (弥生・古墳時代)』千葉県。
 塚原7号：小沢 洋 1992 『木更津市文化財調査集報Ⅰ』木更津市教育委員会。

神奈川県

- 秋葉山3号：押方みはる・山口正憲 2002 『秋葉山古墳群第1・2・3号墳発掘調査報告書—第5～9次調査—』海老名市教育委員会。

山梨県

甲斐銚子塚：坂本美夫 1988 『国指定史跡銚子塚古墳附丸山塚古墳一保存整備事業報告書一』山梨県教育委員会.

長野県

瀧の峯2号：林 幸彦・三石宗一ほか 1987 『瀧の峯古墳群』佐久市教育委員会.

静岡県

神明塚：石川治夫ほか 1983 『神明塚古墳』沼津市教育委員会.

各和金塚：平野吾郎・植松章八ほか 1981 『各和金塚古墳測量調査報告書』掛川市教育委員会.

辺田平1号：久野雅博・鈴木京太郎 2000 『内野古墳群』浜北市教育委員会.

馬場平：辰巳和弘ほか 1983 『引佐町の古墳文化Ⅲ 馬場平古墳発掘調査報告書』引佐町教育委員会.

愛知県

経ヶ峰1号：斎藤嘉彦 1989 「経ヶ峰古墳群」『新編岡崎市史 史料・考古下16』新編岡崎市史編さん委員会.

岐阜県

花岡山：檜崎彰一・平出紀男 1977 『花岡山古墳発掘調査報告』大垣市教育委員会.

象鼻山1号：宇野隆夫ほか 1998 『象鼻山1号古墳一第2次発掘調査の成果一』養老町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室.

三重県

向山：後藤守一 1923 「伊勢一志郡豊地村の二古墳」『考古学雑誌』第14巻第3号.

伊勢野久好 1988 「三重県の前方後方墳」『古代』第86号 早稲田大学考古学会.

新潟県

三王山1号：甘粕 健ほか 1989 『保内三王山古墳群』三条市教育委員会.

富山県

谷内16号：宇野隆夫ほか 1988 『谷内16号墳』小矢部市教育委員会・小矢部市古墳発掘調査団.

石川県

宇気塚越1号：小嶋芳孝・橋本澄夫 1973 『河北郡宇の気町宇気塚越遺跡』石川県教育委員会.

神谷内12号：小西昌志 2004 『神谷内古墳群C支群』金沢市.

宿東山1号：北野博司ほか 1987 『宿東山遺跡』石川県立埋蔵文化財センター.

Diagonal Burial Chambers of the Kofun Period in Eastern Japan

TAKIZAWA, Makoto

Among burial chambers such as keyhole shaped tumuli, there are those whose axis is at a diagonal to the mound's axis. They have often been regarded as having some bearing on the principle of head direction in the burial. Given that diagonal burial chambers frequently appear in keyhole shaped tumuli with a short rectangular frontage, some scholars seek to push their origins back to Yayoi mound burials, and assume that the diagonal placement itself was originally planned as such. The fact that diagonal burial chambers appear particularly in scallop shaped tumuli and Makimuku type tumuli is very important, suggesting a genealogical relationship between these tumuli. Based on this point, this paper examines the precise nature of diagonal burial chambers in eastern Japan which have hitherto been mostly ignored, and considers the meaning of diagonal placement itself and the nature of tumuli with a short rectangular frontage.

In conclusion, diagonal burial chambers survived into the late Kofun period, mainly in tumuli with a short rectangular frontage, and perception of diagonal placement varies according to the shape of tumuli. In the case of tumuli with a short rectangular frontage, the direction of the mound's axis was mostly ignored, while the head direction was rigidly observed, thus resulting in a clear diagonal placement. If we attach importance to continuity in the perception of burials, it is possible to conclude that the origin of the alleged subordinate nature of the tumuli with a short rectangular frontage after the middle Kofun period can be traced back to an earlier stage (Makimuku type tumuli).